大学院リサイタルシリーズ①

秋麗 ～はじまりの音色～

2020年9月26日（土）11:00開演（10:30開場）
洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン1F

- Program -

I.ストラヴィンスキー／イタリア組曲

ヴァイオリン　有福佑依
ピアノ　横田知佳

D.ショスタコーヴィチ／ヴァイオリン協奏曲第1番より

第1楽章、第2楽章カデンツァ、第4楽章

ヴァイオリン　藤岡瑞季
ピアノ　横田知佳

C.ライネッケ／「ウンディーネ」ソナタ　作品167

フルート　山崎春奈
ピアノ　有岡奈保

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

- Program Note -

I.ストラヴィンスキー／イタリア組曲

原曲は、ロシア・バレエ団の総支配人であったディアギレフの依頼で、1919～20 年に書かれたバレエ音楽「プルチネルラ」。プルチネルラはナポリの仮面劇コメディア・デラルテによく登場する人物で、色男である。ピンピネルラは彼の恋人。プルチネルラは街中の女性にモテモテで、カヴィエロとフロリンドが愛するロゼッタとプルデンザも彼に夢中。嫉妬した 2 人はプルチネルラを殺してしまう。死んだ振りをしたプルチネルラは、自分とそっくりなファルボと入れ替わり魔術師として登場。おまじないをするとプルチネルラに扮したファルボが生き返り、プルチネルラも自分の姿に戻り、街中の男がプルチネルラに扮して大騒ぎ。結局、みな扮装を解かせて、それぞれのカップルで仲直りのハッピーエンドを迎える。このお話はイタリア民話にある〈人ちがいものがたり〉で、うりふたつのプルチネルラとその親友のため、彼をそねんで殺そうとする恋仇が裏をかかれてしまうという喜劇である。バロック調でありながら、リズムやハーモニーが近代的であったりと、この頃ストラヴィンスキー独自の“新古典主義”に傾倒するきっかけになった曲である。今回演奏する組曲は、ストラヴィンスキーの友人のヴァイオリニスト、サミュエル・デュシュキンと共同で、1933 年頃、ヴァイオリンとピアノのために編曲された。

序奏：アレグロモデラート 4/4 拍子でト長調が基調の明るく弾んだ曲。

セレナード：ラルゲット プルデンザがプルチネルラへ愛の告白の場面の夜曲。シチリアーノのリズムで物悲しい恋歌がうたわれる。

タランテラ：ヴィヴァーチェ ナポリの舞曲。プルチネルラに嫉妬する男たちがプルチネルラを殺すが、実は死んでおらず、魔術で替え玉が蘇る。

ガヴォッタ・コン・ドゥエ・ヴァリアツィオーニ：アレグロ-アレグレット・ピウ・トスト モデラート 変奏曲を伴う古典的なガヴォット。

スケルツィーノ：プレスト・アラ・ブレーヴェ

メヌエット・エ・フィナーレ：モデラート：モルト・ヴィヴァーチェ　プルチネルラとピンピネルラが結婚のメヌエットを踊る。フィナーレは「めでたしめでたし」の音楽。

D.ショスタコーヴィチ／ヴァイオリン協奏曲第 1 番より 第 1 楽章、第 2 楽章カデンツァ、第 4 楽章

音楽家にとっても、それぞれの場で国威発揚の精神を求められた第 2 次世界大戦が、1945 年に終結。ショスタコーヴィチは戦争中に発表した交響曲第 7 番「レニングラード」で政府からの絶賛を、戦勝を記念して発表された交響曲第 9 番では「西側のモダニズムに毒されている」という批判を受けた。飴と鞭のような扱いで翻弄される状況下、彼はカンタータ「祖国の歌」や、「若き親衛隊」「先駆者の道」

といったプロパガンダ映画の音楽を担当するなどして政府の機嫌をとりながら、国に期待される作曲家という立場を辛うじて保っていた。ショスタコーヴィチ独特の知性あふれる音楽が再び芽吹いたのは、1947 年夏のことである。ヴァイオリン協奏曲という形に育ったその芽は、翌 48 年 3 月に完成。しかし初演のための準備が始まったとき、ショスタコーヴィチはその曲が、政府または芸術を支配する役人によって「西洋かぶれの形式主義」だと批判されることを恐れ、封印してしまったのである。その背景には「ジダーノフ批判」と呼ばれる、国家主導の芸術統制があった（ジダーノフ=当時の共産党委員会書記で、強制的に芸術の審査を行ったアンドレイジダーノフ）。粛正の対象として目を付けられていたショスタコーヴィチは自らの芸術と家族たちを守るため、声を潜めなければならなかったのである。結局のところ、ヴァイオリン協奏曲が再び陽の目を見て初演されたのは、1955 年 10 月になってからだった。1953 年に発表した交響曲第 10 番が国家から認められ、彼自身が「今なら安心かもしれない」とばかりに封印を解いたのである。そうまでして自らの作品を自由に発表できず、国家の顔色をうかがいながらコントロールしていかなくてはならないという状況を生き抜いたショスタコーヴィチ。その強い精神力が他の作曲家と比較できない個性となり、20 世紀を代表する音楽家と認められるようになったということは、なんという壮大なアイロニーだろうか。曲はダヴィドオイストラフのヴァイオリン、エフゲニ・ムラヴィンスキー指揮によるレニングラード・フィルハーモニー交響楽団の演奏で初演された。こうした状況により楽譜の初出時は「99」という作品番号が付けられていたが、現在は作曲時に戻した「77」に変更されている。

第 1 楽章「ノクターン（夜想曲）」ソロ・ヴァイオリンによる終わりの見えないようなモノローグが長い導入部となり、そのまま終始、ソリストが音楽をリードしていく。常に何かに不安を感じながら過ごしている、作曲者の心情を描いたような音楽。

第 2 楽章「スケルツォ」フルートが演奏する軽快なテーマを遮るように、ソロ・ヴァイオリンが音のくさびを打ち込んでいく。それがそのままテーマとなり楽章全体をけん引。

長大なカデンツァではソロヴァイオリンが「私はここにいる！」とばかりに「DSCH の動機」を演奏する。曲は休みなく第 4 楽章へ。

第 4 楽章「ブルレスク」木管楽器群とシロフォン等による民族的なメロディが響き渡り、ソロ・ヴァイオリンやオーケストラの各楽器がアクロバット的な演奏を繰り広げる。

C.ライネッケ／「ウンディーネ」ソナタ　作品 167

ドイツ出身のカール・ライネッケ（1824-1910）は、 指揮者、ピアニスト、作曲家でありながら、教育者としても活動していた。音楽教育者の父をもち、7 歳で作曲を始め、12 歳でピアニストとして公開演奏を行っていたライネッケはその後、ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団では指揮者を、ライプツィヒ音楽院では教授を務め、そして数多くの作品を残した作曲家として、19 世紀末、ドイツで大活躍した。『ウンディーネ』ソナタ 作品 167 は、ライネッケが、ドイツ・ロマン派の作家、 フリードリヒ・フーケ（1777-1843）の小説、「ウンディーネ （1811）」 に着想を得て、1882 年に作曲された。この曲は、ライプツィヒ音楽院教授で、ゲヴァントハウス管弦楽団の首席フルート奏者のヴィルヘルム・バルゲに献呈されたが、当時ベーム式フルートを率先して取り入れていたライネッケは、旧式のフルートを使用しているバルゲの代わりに、クラーラ・シューマンやサン＝サーンスとも共演していた著名なフルート奏者で、ベーム式フルートを用いていたアメデ・ドゥ・フロエ（1835-1906）のフルート、作曲者自身のピアノ伴奏により、1884 年 1 月 12 日、ライプツィヒにて初演された。水の精ウンディーネと、騎士のフルトブラントの悲劇的な恋物語を描いた小説、『ウンディーネ』。ライネッケの作り出す音楽に乗せて、水の世界がときに激しく、ときに穏やかに、美しく表現されている。

第 1 楽章：Allegro ホ短調 6/8 拍子 ソナタ形式　フルートが提示する第 1 主題が、ウンディーネを想起させる。起伏のあるテーマが、水や波のうねりを感じさせる。

第 2 楽章：Allegretto vivace ロ短調 2/4 拍子 スケルツォ　Più lento, quasi Andante　16 分音符のスタッカートにより、ウンディーネの無邪気さや、妖精の軽やかに羽ばたく姿が描かれている。対して、中間部では「ヴィブラートなしで」と指示があり、それにより異次元的で、神秘的な世界が表現されている。

第 3 楽章：Andante tranquillo ト長調 4/4 拍子 三部形式　途中、水の世界から邪魔が入りながらも、フルブラントと結ばれ、人間の魂を得たウンディーネの、愛の情感、対話が描かれる。

第 4 楽章：Allegro molto agitato ed appassionato quasi Presto ホ短調 4/4 拍子 ソナタ形式　フルートが第 1 主題を提示し、ピアノは後を追うように奏でられる。激しい音楽は、ウンディーネたちの悲劇的な恋を象徴しているようだ。最後は 2 人の死を表すように、静かに幕を閉じる。

-Profile -

2 年　有福佑依（ヴァイオリン）

東京都出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を卒業。
これまでにヴァイオリンを故・益子絢子、本多菜穂子、堀越みち子、沼田園子の各氏に師事。また、ヴィオラを古川原裕仁、須田祥子の各氏に師事。室内楽を安永徹、市野あゆみ、小林すぎ野、須田祥子、古川原裕仁、羽川慎介、大野かおるの各氏に師事。リチャード・ディーキン、オレグ・クリサ、ナムユン・キム、フェデリコ・アゴスティーニ、ヴィルフリート・シュトレーレの各氏が来日時、特別レッスンを受講。
第 7 回、8 回音楽大学オーケストラ・フェスティバルやラ・フォル・ジュルネ東京 2017、2018、学内において、室内楽演奏オーディション合格者による披露演奏会などヴァイオリン、ヴィオラで多数出演。

2 年　藤岡瑞季（ヴァイオリン）

3 歳よりヴァイオリンを始める。神奈川県立川和高校、洗足学園音楽大学を卒業。平成 24 年度神奈川県高文連ソロコンテスト教育長賞、最優秀音楽賞。第 2 回日本奏楽コンクール一般 A の部第二位(最高位)。第 40 回草津夏期国際音楽アカデミースチューデントコンサートにて西村朗音楽監督賞を受賞。学内コンサート『大学院コンチェルトの夕べ』オーディションに合格しソリストとして洗足学園音楽大学大学院管弦楽団、現田茂夫氏と共演。これまでに、ヴァイオリンを勅使河原真実、水野佐知香の各氏に師事。2017 年から現在まで安永徹・市野あゆみ両氏による特別講座「ヴァイオリンとピアノのためのデュオ」を受講。

1 年　山崎春奈（フルート）

8 歳よりフルートを始める。大友太郎、菅井春恵、高橋聖純、室木志穂の各氏に師事。第 18 回みえ音楽コンクールフルート部門中学生の部第 1 位及び岡田文化財団賞。 国立音楽大学演奏・創作学科弦管打楽器専修フルート専攻卒業及び管打楽器ソリスト・コース修了。在学中、故 H.シュマイザー、S.ティリー各氏のマスタークラス、小泉浩氏の特別公開講座を受講し、研鑽を積む。また、2016 年 6 月、フルートカルテット Chou Chou Torte を結成。福祉施設、ホテル、レストラン等での演奏や、3 度の自主企画公演、コンクールへの出場等、アンサンブルでの活動も積極的に行う。